

株式会社 エスクリエイト
名古屋市中区錦一丁目4番16号 日銀前KDビル4階
TEL: 052-222-3600 FAX: 052-222-3699
URL: <http://screate-soft.co.jp/>
担当: コンサルタント 石垣 智博
tomohiro.ishigaki@screate-soft.co.jp

知的好奇心を刺激しよう！

2月になりました。私は年を重ねるごとに寒いのが苦手になっています。10年ほど前はスキーに行くのも億劫ではなかったのですが、最近は寒いのでちょっと・・・と思う次第。あともう少しの辛抱で春になります。待ち遠しい。

さて、今月は書店で「知」の補給をするという話題です。

◆やはり書店はいい

以前のSC通信(2013年8月号)で「最近の流行を書店で感じる」として下記の記事を掲載しました。

さて、筆者は書店が大好きです。本が好きなのもありますが、平積みされた本から、最近の流行が感じ取れるからです。

:

約1年半経っていますが、書店好きは相変わらずです。amazonなどネット書店では、書店在庫がない場合にとっても重宝します。しかし、ネット書店だと、本当に話題か？と感じる「話題の本」や個人の検索傾向をベースとした「おすすめ」がHPのTop画面に出てきますので、流行を感じるにはちょっと・・・と思っています。

書店でも書店(取次?)が押したいものを平積みしているのですが、売れ筋じゃないと長い期間平積みされませんし、実際手に取っている人を見ることができるので、書店の方

が流行りを感じやすいと思います。なんといっても書店だと手に取って読めるのが良いですね。(立ち読みともいう・・・)

◆最近の山積みになっている書籍

最近だと、トマ・ピケティ氏の書籍に関するものが山積みになっています。私は平積みになっていることでピケティを知りました。「21世紀の資本」という書籍です。(1月末に来日されたようです。)タイトルの通りその書籍は経済に関する書籍です。難しいと感じる方向けに「ピケティ入門」「21世紀の資本を30分で理解する」といった解説本も出版されています。経済雑誌でも特集されており、まだまだピケティ関連は書店を賑わせそうな勢いです。「21世紀の資本」及びその関連本はかなり売れています。(売れているから賑わっているとも言えます。)

◆ピケティの「21世紀の資本」って？

週刊東洋経済2015年1/31号では、「富裕層が占める所得シェアや資本・所得内容など細かく分析し(中略)富と所得の歴史的変動について研究した集大成が『21世紀の資本』です。」と説明しています。この「21世紀の資本」の肝は「資本収益率は経済成長率を常に上回る」というところです。株や土地、さらには機械、特許などの資産が稼ぐ収益率が労働所得から得られる収益率よりも大きいということです。資産を持っているモノがより裕福になっていくということでしょう。詳しくは、「21世紀の資本」含め様々な書籍に譲りますので、是非読んでみるとよいでしょう。色々論争があるようですね。

◆いろいろ見て回る

話を戻します。書店で注意しなければならないのは、その時の自分が「気になっているコト」にだけ目が行きがちになることです。書店へ行く動機は「気になっているコト」を探しに行くものです。ただ、それだけではもったいないです。せっかく書店に行ったのなら、それ以外の棚を見て回ると面白いこと発見できるかもしれません。大きな声では言えませんが、立ち読み結構だと思っています。興味がわいたら(買う価値があると思えば)買えば良いと思います。

◆書店で知的好奇心を刺激

書籍の役割は「知識を得ること」と「娯楽」だと考えられます。知識を得るというのは、書籍は「人類の英知の記録」と思います。昔は物に書き記し、知識・ノウハウを伝承していくことが国を治める者の仕事でした。知識・ノウハウを伝承する読書は人としての使命なのかもしれません。また、推理小説や趣味の本など娯楽として楽しむ面もあります。

しかし、そもそも読もうと思わないと書籍を手取ることはないですよね。

その書籍を扱っている書店に行くことは、「自己の知的好奇心に刺激を与える」ことができるからです。読書のきっかけが得られるというべきでしょうか。目的がなくふらりと立ち寄っても、次第に好奇心がわいてくる場所が書店です。なにげに本を手にとってしまうのが書店です。脳が勝手に知識の欠乏を補おうと働いていると感じます(科学的な根拠はないですが…)。

読書は人としての使命と書きましたが、堅苦しいことは考えずに、まずは書店で知的好奇心を刺激させてみませんか、きっと何か見つかると思います。

「本は考える為のサプリメント」(その 46)

今月ご紹介する書籍は、ビジネス書の長年のベストセラーです。「本書は1998年10月に日本経済新聞社からから刊行されたもの」とあります。内容は、現在でも色あせる

ことなく、まさに経営と会計の実学が記してあると思います。



「稲盛和夫の実学 経営と会計」(稲盛 和夫 著)

原則に徹する姿勢と徹底、会社と社員を守る運用、透明な経営に関する考え方など感銘を受ける箇所がたくさんありました。また、当たり前のことをしっかりやっているという印象も受けました。(セラミック石ころ論、値決めは経営、キャッシュフロー経営など)今では当たり前の概念をその当時にやっていたというのがすごい。

減価償却に関する償却期間の考え方は管理会計で法定耐用年数を利用することの是非を深く考えずにいたなど痛感させられました。反対に人に罪をつくらせないダブルチェックについては我が意を得たりと思いました。

また、売価還元原価法についてはもう少し研究(勉強)して腑に落としたくなりました。売価還元原価法は製品ごとの原価計算ではない方法という認識が私にはあるからです。本書に記載されている通り、標準原価計算がなじまない(製品数がとても多く原価計算に手間がかかる)会社も確かにあります。その解決策になりえるのか?です。売価を物凄く慎重に決めているからこそできるのではないのか?と現段階では思っています。

さらに、第二部の経営問答も得るものありです。経営課題に関する質問に著者が答えるというものですが、第一部で記されている実学が問答にしっかり反映されています。

こんな感想を持つのは変かもしれませんが、読んだ後とても気持ちがよくなりました。

経営者だけではなく、リーダーや会計担当者はもとより生産管理・改善などに携わっているビジネスパーソンにも必読だと感じました。多少会計に関する知識が必要です。しかし、会計に関係しないビジネスパーソンも読んでおくべきで書籍です。本書では会計がわからなければ真の経営者になれないとあります。現在では会計がわからなければ真のビジネスパーソンとなれない時代と言われて久しいです。

以上